

『講左衛門さん、今日は富士講の系譜についての話でまっすん。富士講の開祖は、長谷川角行でまっすん。角行の後継者に、日行日珥（にちぎょうにちがん）、その後、赤葉珥心（あかばがんしん）、前野月珥（げつがん）、村上月心（げっしん）、月心と同時期に月行劔仲（そうじゅう）と続いたでまっすん。月心の死後、月心の次男、村上光清は、月心の後継者となり、ほぼ一系統で代を重ねた光清派ができたでまっすん。劔仲の弟子に食行身禄（じきぎょうみろく）が現れ、劔仲の後継者となり、後に多くの弟子が枝分かれした身禄派という主に二つの系統に分かれたでますん。』

『クニマッスンは、よく調べておるな。まずは、村上光清について話をしようと思っておる。光清（1682年～1759年 俗名：三郎右衛門）は、角行から数えて5世の月心が父親で、12歳の時に月心と共に富士山に登ったと伝えられておる。光清は、江戸富士講の一大勢力をまとめた人物だったんじゃよ。1733（享保18）年、光清は寄進を募って北口本宮富士浅間神社の社殿などの施設整備を始め、5年の歳月をかけて大規模な修復工事を完成させたんじゃ。しかし、社殿竣工を頂点として光清たちの勢力は衰えて行ったが、上吉田の人々は感謝を忘れることなく、今でも社殿には光清派の講印「藤の丸」が輝きを放っておるぞ。北口本宮富士浅間神社の社殿や境内地の施設の多くは、光清が願主となって整備されておるから、光清の印が残されている建造物や石造物が数多く残されておる。北口本宮富士浅間神社に行ったら探してみるのも面白いぞ。登山道入口に建つ祖霊社には、角行と身禄と共に光清も祀られ、富士登山を見守っておるぞ。光清は、社殿整備の実績が目立って取り上げられているが、富士登山を始めとする修行を数多く実践してきた富士行者でもあったことを忘れてはいかんぞ。』

『富士講にも、様々な歴史やドラマがあるでまっすん。富士山の玄関口である北口本宮富士浅間神社の社殿が壊れていたら、信者は悲しいでまっすん。寄進者を募ることは、いつの時代も大変でまっすん。けれども、光清が施設整備をしてくれたお蔭で、現在に残る北口本宮

富士浅間神社があるということは、あり難いでまっすん。』

『そうじゃ。何事も、繋がっていることを忘れてはいけないんじゃよ。さて、今回は、食行身禄について、また、身禄派の系譜について話をしようかのう。』

『身禄の魅力をたっぷり聞かせてほしいでまっすん。楽しみでまっすん。』

※参考資料:ふじさんミュージアム資料解説



クニマッスン

出生地 忍野村

山梨県水産技術センター

□癖 でまっすん…

ふじのだいがこうざえもん  
富士大我講左衛門 年齢不詳

職業 大我講の先達  
(先達とは案内責任者)

